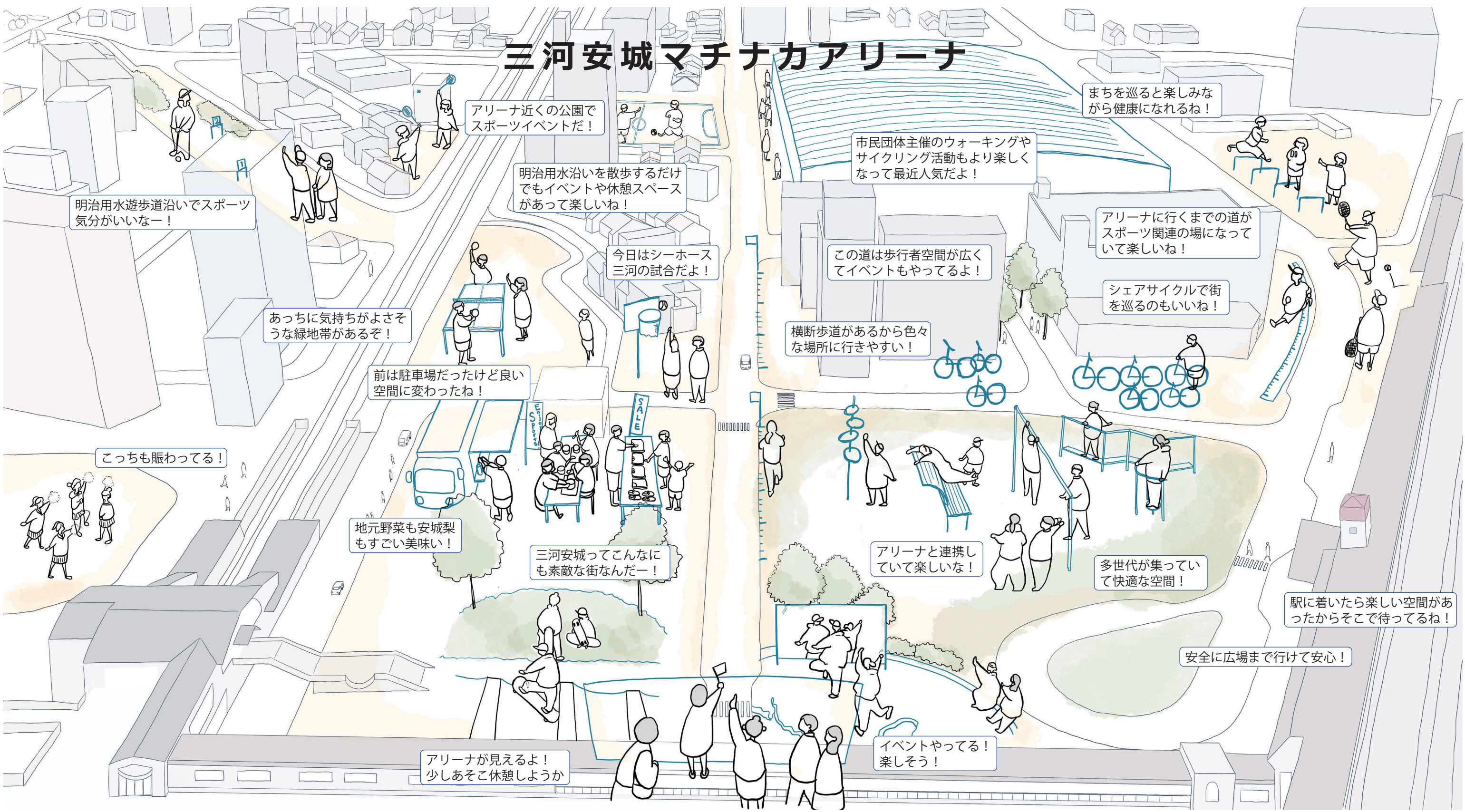
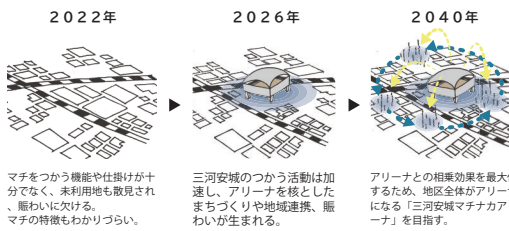


三河安城マチナカアリーナ



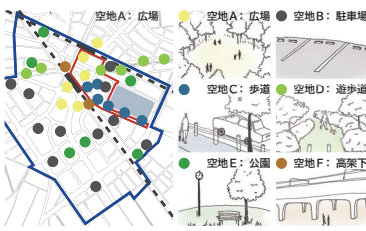
01 三河安城マチナカアリーナをつくる

強力な集客装置である2026年建設予定のアリーナ(多目的交流拠点)が駅近くにある事により、三河安城のつかる活動は加速し、アリーナを核としたまちづくりや地域連携、賑わいが生まれることが予想されます。そこで、ホームタウンである「シーホース三河」を中心としたスポーツや関連イベント、安全・安心につながる防災/緊急拠点、教育や生活支援等、地域貢献拠点となるアリーナとの相乗効果を最大化するため、三河安城マチナカ協創地区全体がアリーナになる「三河安城マチナカアリーナ」を目指します。



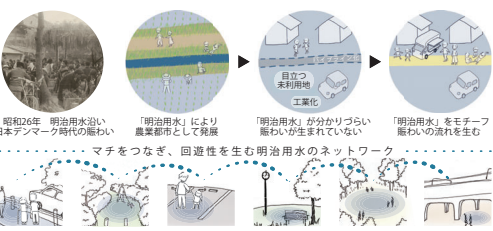
02 空地の積極的活用

駅前をはじめ三河安城マチナカ協創地区内には大小さまざまな空地や、ゆとりのある空間が散見されます。そのような場をサテライトアリーナとして見立て、積極的に活用します。アリーナの活動に関連するスポーツや健康維持増進の場やイベント、日常生活や災害時対応、教育や学習をサポートする場になり、回遊性や滞在性を高めます。



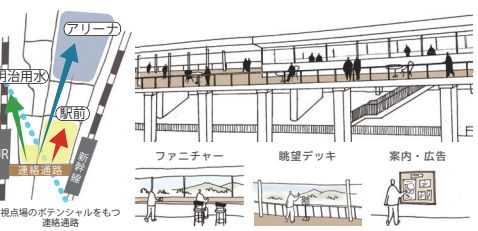
03 三河安城らしさ=明治用水の可視化

現在は工業色が強い安城市ですが「明治用水」によって「日本デンマーク」と呼ばれるまでの農業地帯に発展した歴史があります。マチの発展の礎を築き、市民の生活に寄り添う「明治用水」ですが、駅前は見えなくなっており、大きな建物や空地が多いことも相まってマチが分断されています。三河安城らしさ=「明治用水」をモチーフとした場をつくる又は可視化することでアイデンティティを高め、分断されたマチをつなぎ、回遊性を高め賑わいを波及させます。



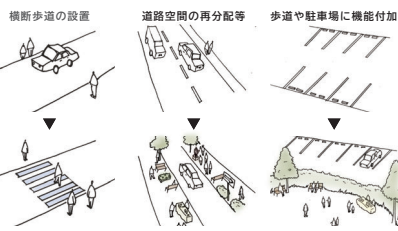
04 視点場としての連絡通路

在来線と新幹線駅を結ぶ連絡通路は、設備の不足や老朽化といった課題がみられるものの、駅前やアリーナに向かって開かれており、視点場としてのポテンシャルを有しています。そこで、少し高い位置からマチナカの賑わいや全体を感じらる視点場をつくります。連絡通路の長さや高さを活かしたファニチャーや部分的に半外部化した眺望デッキの設置、壁面を利用した広告や案内を設けます。ただの通路ではなく、マチの回遊性や滞在性を高める要素の一つとして活用します。



05 連続する楽しい歩行者空間

車道で分断された場所、円滑な移動や安全が十分ではない場所、魅力的な歩行者空間ではない場所が多く見受けられました。そこで、必要箇所に横断歩道の設置や道路空間の再分配及び交通規制等、歩道や駐車場の一部に機能を付加します。歩いて楽しい歩行者空間が連続し、アリーナや見立てのサテライトアリーナをはじめとする要所等をめぐることで回遊性を高めます。



06 多様な主体が連携する健康なまちづくり

市民・民間・行政をつなぐ既存の「安城市公民連携フロント」と連携して「協議会」を設けます。マスタープランの方向性は堅持しつつも、様々な場所のプロジェクトを優先的に進め、具体的なまちの変化を通して市民や民間の様々なステークホルダーを巻き込み、共有や発信ができる体制を構築します。公民連携でまちづくりを進め、お互いもつと、モノ、資産を活かして利益を生み出し続ける持続可能なまちづくりにつなげます。具体的には、アリーナとの連携で生まれる収入やキッチンカーの売上の一部を地域貢献費として運営に使える仕組みの構築や、広告の掲出と得た協賛金を維持管理に充てるなどが考えられます。また、2040年の完成を目指して4つのステップを繰り返しながらプレイスメイキングを継続的に行うことで持続可能なまちを共につくります。主体となる利用者や各企業もコミットし、計画に反映される仕組みとします。また、ウェルビーイングな脱炭素化社会やSDGsの実現に参画するためのイベントや事業を行います。

